

東チベットにおける

統一戦線活動と政教関係

——キルティ寺とラルン五明仏学院を中心に——

川 田 進

はじめに

東チベット各地を歩き始めて二十数年が経過した。⁽¹⁾ 正確には一九九一年以降、二八年間に二八回、ほぼ毎年一回のペースで八月または一二月に短期調査を繰り返してきた。一回の調査期間は一週間から二週間、これまでの総調査日数は約三〇〇日にすぎない。滞在日数から換算すると、概ねチベット高原東南部のカムが七割、東北部のアムドが三割である。政治的な緊張の度合いは、総じてカムの方が強い。今振り返れば、様々な制約がある中で、多くの調査を

胡錦濤政権の時代（二〇〇二～一三年）に実施できたことは幸運であった。筆者は当初、青海省や甘肅省のアムド地域を中心に調査を開始した。雄大な自然、素朴な人情、多様な宗教文化、多民族の集住、高地体験等に魅せられて興味は尽きなかった。その後、本稿で取り上げる二つの町との出会いから、東チベットにおける統一戦線活動と政教関係に傾倒していった。政教関係の調査では、一つの場所に長居は禁物だ。原則として一つの町や村での滞在は、一泊もしくは二泊である。東チベットの各地には、中国共産党の軍事行動の足跡が色濃く残り、中国では政治的に敏感な地域と見なされる場所が多いからだ。

中国共産党は文化大革命終結後、党外の勢力と交渉を行い味方に付ける統一戦線活動を重視する政策に転じた。チベット問題に関しては、鄧小平の指示を受けてインドのチベット亡命政府と接触し、最終的にダライ・ラマ十四世（以下ダライ・ラマ）の帰還を目指した。国内のチベット仏教寺院に対しては、各地域で影響力を持つ高僧に働きかけ、中国人民政治協商会議の委員（大多数は市や県レベルの委員会）や愛国宗教組織である中国仏教協会の幹部（中央と地方）に任命し、党・政府と地元住民の間で利害調整役を果たすことを求めた。

中国共産党の対外的な統一戦線活動の場として筆者が注目した町は、四川省阿壩^{アバ}藏族羌族自治州（以下アバ州）の阿壩県（以下アバ県）である。ここはチベット問題が凝縮された町であり、中国共産党による「ダライ集団」への批判や愛国主義教育が盛んである。市街地に建つチベット仏教の大僧院キルティ寺（一八七〇年創建）は、二〇〇九年以降、複数の僧が中国共産党の宗教政策への批判を目的に焼身抗議を行ったことでも注目されている。筆者は一九九九年と二〇一一年にアバ県を訪問したが、チベット問題を抱える町と寺の姿は大きく変化していた。

文革後の東チベットにて、中国共産党とチベット仏教の政教関係が最も色濃く表れた町は四川省甘孜^{カンゼ}藏族自治州（以下カンゼ州）色達^{セダ}県である。ここにはラルン五明仏学

院というチベット仏教の教学拠点があり、ケンポ（学堂長）と呼ばれる高度な学問を備えた高僧を中心に、一万人を超すチベット僧や漢族の信徒を抱えている。鄧小平時期に創設され、胡錦濤時期に発展し、江沢民と習近平の時代に肅正を受けた歴史をもつ。中国共産党の宗教政策に揺さぶられ発展と肅正が同居する仏学院にて、筆者は二〇〇一年以降定点観測を続けてきた。

本稿は大僧院と仏学院という二つの宗教拠点を舞台にした中国共産党の統一戦線活動に焦点を当てることにより、東チベットにおける政教関係の特質を浮き彫りにすることを目指す。東チベットにおける政教関係は、大学や政府系研究機関に籍を置く中国人研究者が取り組むことが困難な課題であるため、外国人研究者が独自に調査を行い、成果を公表する意義は大きいと言える。

一 チベット亡命政府との駆け引き

（一）政治スローガン（一九九九年）

東チベットを歩き始めて一〇年目の一九九九年にようやくアバ県に到着した。アバ県は四川省アバ州を構成する一市一二県の一つであり、ひとときチベット色の濃い町である。当初一九九三年の訪問を考えていたが、情報不足もあ

り、なかなか決断がつかなかった。九三年にアバ州の紅原県を訪問した際、県公安局にアバ県と若爾蓋県への旅行を願ひ出たところ、「両県とも対外未開放」という理由で却下された。その後、アバ県が正式にいつ対外開放されたのかは不明であるが、いわくありげなこの町は今でもしばしば外国人の立入が制限される。それから六年後の一九九一年二月、成都を出発しアバ州内の松潘、若爾蓋、紅原を経由して無事にアバに到着した。紅原に滞在中、街頭で公安に呼び止められパスポートのチェックを受けた際、唐突に「外国人はアバへ行かないように」という忠告を受けたことを覚えている。当時私がアバに抱いていた関心は、長征時の張国燾とキルティ寺の高僧についてであった。私が東チベットの中でアバ訪問を重視した理由は、学部生の時に受講した中国現代史の授業で、ここが長征の重要な歴史舞台であることを知ったからであり、亡命した高僧の視点から東チベットの政教関係を読み解く鍵となる町だと考えたからだ。

アバ市街に到着した日の夕方、目抜き通りの沿塘街にて、迷彩服に身を包んだ治安維持部隊と思われる二、三〇人の一団と遭遇し、町を覆う威圧的で重苦しい雰囲気は圧倒された。次に裏通りの徳吉路を歩くと、党や政府の庁舎が次々と並び、人通りのない寂しい様子であった。徳吉路で気づいたことは、各電柱に政治スローガンの看板が掲

げられていたことだ。その中の一枚は露骨なダライ・ラマへの批判であり、東チベットでこのような過激なスローガンを目撃したのは初めてであった。

「愛国主義教育を繰り広げるのは、ダライ集團という分裂勢力の影響を一掃する必要があるからだ。アバ県人民法院」

一九五九年にダライ・ラマがインドへ亡命し、六〇年にインド北部の町ダラムサラにチベット亡命政府を設置したことは周知の事実である。亡命後、中国共産党はダライ・ラマを敵と見なしてきたため、「ダライ・ラマ」という尊称は基本的に用いない。中国当局が用いる「ダライ」や「ダライ集團」という呼称には、ダライ・ラマ及び亡命政府



写真1 ダライ集團批判のスローガン
(1999年12月筆者撮影)

に対する敵対心と侮蔑感が込められている。整理すると、人民法院が掲げたスローガンは次の三点を訴えている。

(1) 中国共産党はダライ・ラマをチベット独立運動の首謀者として見なしている。

(2) ダライ集団の影響力をアバ県から排除する必要がある。

(3) そのためには愛国主義教育を展開する必要がある。

アバ県党委員会が「ダライ集団」批判を重視する背景には、チベット問題の他にアバが背負ってきた紅軍と党の分裂という重い歴史が関係していると筆者は考える。つまり、長征途上の一九三五年、毛沢東と党の政策に反旗を翻した新たな「党中央」の成立を宣言した張国燾の軍事行動は失敗に終わり、毛沢東は張国燾を「党と紅軍の分裂を画策した主謀者」として厳しく断罪した。アバ県の党委員会にとって、張国燾のキルティ寺を拠点とした分裂活動の記憶はいまだ鮮明であり、香港に亡命後カナダへ移住した張国燾の末路をダライ・ラマ批判に巧みに利用していると考えられる。つまり、先に紹介したスローガンから、「チベット亡命政府の策略は張国燾同様に必ず頓挫する運命にある」というメッセージも読みとることができる。

(二) キルティ寺の愛国主義教育

アバ中心部の洽塘街を西に進むと、右手にチベット仏教

ゲルク派のキルティ寺が見えてくる。早朝、境内には香炉で焚いた草

のにおいがたちこめていた。気温は

零下一〇度前後で

あろうか、本堂前

の広々とした空間

には厳肅な雰囲気

が満ちていた。見

ると、一〇代の少

年僧約二〇〇名が

本堂前に集まり、

整然と座っている

。少年僧の両脇には老僧が数名ひかえており、緊張がと

ぎれてふざける少年僧に叱咤の声をとばしていた。やがて

威厳をそなえた指導僧があらわれ、少年僧に向かって約三

〇分間説法を行った後、老僧たちがすべての少年僧に五元

の現金を渡してまわった。

あとで僧坊をたずね、さきほどの少年僧に説法の内容を確かめてみたところ、「仏法の教え」「愛国主義教育」「政治学習」と返答した。皆口々に「つまらない」とぐちをこ



写真2 高僧による説法と愛国主義教育
(1999年12月筆者撮影)

ぼした。どうやら經典のなかの一節をわかりやすく説明した後、寺院内での規律の乱れや客人への接し方といった生活指導の話、中国共産党の宗教政策等を聞かされていたようだ。どうりで数人の役人風の男が脇で話を聞いていたわけだ。複数の少年僧の話から、「毎月一回このような政治教育が行われる」「アバ州内の規模の大きな寺院では、定期的に愛国主義教育が行われている」「県宗教局の職員がチベット語で祖国統一や民族団結の重要性を語ることもある」ことがわかった。「キルティ寺は他の寺院よりも愛国主義教育を熱心に実施することが求められている」とのこと。

宗教関係者向けに編まれた『愛国主義教程』[「国家宗教事務局編2005」]によると、愛国主義教育の柱は(a)中華民族精神の涵養、(b)憲法と法律の遵守、(c)社会主義制度の擁護、(d)中国共産党による指導の擁護、(e)民族団結と祖国統一の擁護、(f)国家の主権と安全の防衛である。中国共産党が考える愛国主義の核心は、中華民族の団結と祖国の統一であり、民族問題や宗教問題を抱えるチベット族やウイグル族の居住地区では、特に(a)(e)(f)が重視されている。中華民族は中国共産党が「漢族と五五の少数民族の総称」と位置付ける政治的な概念であり、チベット族やウイグル族の中には、自分たちを中華民族の一員と見なすことに強く反感する者もいる。

(三) キルティ・リンポチエへの統一戦線活動

アバ滞在中に、筆者はチャリ寺(チベット仏教ゲルク派、一八二三年創建、アバ県查理郷)の僧と知り合い、キルティ寺とチャリ寺の関係をめぐる話が弾んだ。その夜、僧が筆者の宿をたずねて来た際、「一八〇キロ離れたチャリ寺から、アバの大仏塔は紅く見えるよ」と語った。その仏塔はキルティ寺復興のシンボルである。高さ三九メートルの堂々たる白亜の大仏塔の周囲には二四基の小仏塔が配置され、さらにその外側をマニ車の回廊が巡っている。その威容から間違いなくチベット文化圏屈指の仏塔である。

アバは海拔約三三〇〇メートル。冬は早朝の冷え込みこそ厳しいが、昼間はよく晴れわたり、夏を思わせるような陽光がさんさんと降りそぐ。仏塔の周辺は



写真3 キルティ寺の大仏塔(1999年12月筆者撮影)



写真4 キルティ11世

<http://lung-ta.org/51707367-2/>
(2018年5月10日閲覧)

近隣の老人たちの憩いの場であり、絵に描いたようなのどかな祈りの風景が眼前にひろがっていた。では、チャリ寺の僧はなぜこれを「紅い仏塔」と呼んだのか。筆者は文化大革命終結後に繰

り広げられた中国共産党の活発な統一戦線活動を色に例えて揶揄したのだと理解した。『阿壩県志』から歴史をひもといてみよう「阿壩県地方志編纂委員会編1993: 602-603」。中華人民共和国成立後、一九五三年に中国共産党阿壩県工作委員会が設置されたが、当時阿壩県には共産党以外に、地主や寺院という土着の権力が存在していた。そこで共産党は一九五八年に彼らから土地、生産手段、財産、武器等を没収し、社会主義体制に一本化するべく民主改革と呼ばれる社会改造に着手した。地主や寺院は即座に反発し、武器を手には共産党勢力と衝突した結果、双方に多数の犠牲者が出たが、最終的に共産党が武力でねじ伏せ、農民や牧民を公私共同経営組織に加入させて政治学習を強制した。

当時キルティ寺は僧千数百名を擁する阿壩県最大規模の僧院であった。座主のキルティ十一世（一九四二―、以下キルティ・リンポチェ）がラサ滞在中であったため、多数の僧は還俗を強制されたり農業生産への従事を命じられたりした。この時、寺院の主要部分が破壊されたと考えられる。そして農民や寺院から土地、家畜、武器、アヘン等を没収し、党と政府の管理下に置き社会主義改造は終わった。そして翌年三月、民主改革運動の嵐が目前に迫るラサで、共産党とチベット族住民の間で騒乱が発生した直後に、ダライ・ラマは側近を連れてインドへ逃れた。そして五月にキルティ・リンポチェも亡命の道を選択した。

その後、文化大革命を経て阿壩県に宗教復興の光が射したのは鄧小平の時代であった。一九八〇年三月、北京で第一回チベット工作座談会が開催され、宗教活動の再開、還俗者の寺院復帰、寺院の再建、チベット亡命政府との交流促進等が決定した。キルティ寺はその年の一月に活動再開の許可が下りた。そして一九八二年一〇月、党中央が派遣したパンチェン・ラマ十世（以下パンチェン・ラマ）が阿壩県を視察に訪れた際、民族団結の重要性を訴えるとともに、宗教復興の早期実現に向けて指示を出した。パンチェン・ラマは建国後、中国共産党により還俗を強制され、「愛国」人士として中央とチベットの橋渡し役を担われた「高僧」である。

それから五年後、一九八七年一〇月一日にキルティ寺再建のシンボルとなる大仏塔の竣工式が行われた。費用は政府が準備した三〇萬元と寺院の資金で賄われた。アバの住民は筆者に「仏塔の建設はパンチェン・ラマの置き土産だ」と語った。国慶節の日に式典を開催した理由は、文化大革命終結後、中国共産党の宗教政策が着実に実を結んだことをキルティ・リンポチェの前で誇示するためであった。『阿壩県志』によると、一九八七年八月から一一月にかけて、インド亡命中のキルティ・リンポチェがアバに一時帰還したとある。一九八四年到北京で開かれた第二回チベット工作座談会では、高僧の権益保障、亡命者の親族への配慮等を柱とした積極的な統一戦線活動の推進が確認されたことも踏まえれば、大仏塔の完成とキルティ・リンポチェの一時帰還実現は、中国共産党がチベット亡命政府に向けて仕掛けた戦略的な統一戦線活動の成果であると筆者は考える。その背後には中国共産党とダライ・ラマ側との和解協議進展に向けた期待が見え隠れしている。チャリ寺の僧が白亜の仏塔を「紅い仏塔」と表現した理由は、パンチェン・ラマによる仏塔建設とキルティ・リンポチェの一時帰還という統一戦線活動のあざとさを見抜いたからだと思われる。

筆者は一九九九年当時のアバは予想以上に開放的であると感じた。そのことを示す事例が二つある。一つはキル

ティ寺に併設されたアバ県洽塘西街小学校である。学校関係者は、「生徒数は少年僧約二〇〇名、教師はキルティ寺の僧が務めているため、実質的に僧院小学校であり、地元政府との関係は良好である」と語った。もう一つは成都とアバを結ぶ長距離バスのフロントガラス外側に掲げられたダライ・ラマの写真である。中国共産党が祖国分裂主義者と見なすダライ・ラマの肖像が堂々と掲げられていることは驚きであった。バスの運転手は「問題ない。アバのチベット族は祝下を尊敬している。幹部たちも同じ思いだ」と言い切った。筆者は当時のアバの状況を、キルティ・リンポチェの帰還実現に向けた地元党・政府のメッセージであると受けとめた。

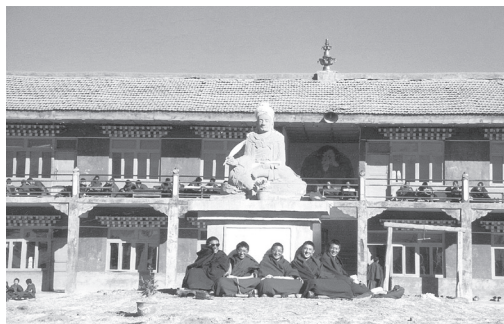


写真5 アバ県洽塘西街小学校（1999年12月筆者撮影）

二 東チベットの抗議活動とキルティ寺

(一) アバ包囲網と新主席大臣就任 (二〇一一年)

二〇一一年八月、一二年ぶりにアバを再訪した。この時期のアバは公安の警備が厳しいことは事前に予想していたが、四川省カンゼ州の色達から青海省の班瑪を経由しアバ方面に向かう車に便乗させてもらった。到着日の夜、最も賑わうアバ中心部の洽塘街には厳戒態勢が敷かれていた。

「武警八七四〇部隊」の看板を掲げた大型トラックと装甲車が次々と巡回し、歩道の両側には約三〇メートル間隔で立哨ボックスが置かれ、銃を手にした治安維持要員の脇には防護盾、消火器、放水銃、担架などが準備されていた。そして洽塘街が郊外に接する東西二箇所には監視所が設けられ、アバ市街に入る車輛をチェックしていた。武警とは中国人民武装警察部隊の略称であり、党と政府の指揮下で治安維持活動全般（要人警護、国境警備、地下資源・森林・ダム・消防・交通の管理等）を担っている。八七四〇部隊は四川省南充市を拠点とする機動部隊であり、四川省全域を担当すると同時に省内少数民族地区の監視に力を入れている。二〇〇八年四川汶川地震発生直後に大規模な救援活動を展開したことで知られている。

警備が厳しい理由は、チベット亡命政府の新たな動向と

多発する焼身抗議の問題であった。筆者がアバ市街に滞在した二〇一一年八月八日、チベット亡命政府の本拠地であるインド北部のGRAMSラでは、ロブサン・センゲ氏（一九六一）の主席大臣（政治最高指導者）就任式が行われていた。

センゲ氏はインド生まれのチベット難民であり、アメリカの

大学で政治学者として活躍した経歴の持ち主である。展望が開けない亡命社会に変化を望む若者や急進的な意見を持つ僧の支持を集めて、亡命政府の新主席大臣に直接選挙で選ばれ、ダライ・ラマから政治権限を移譲された。就任後センゲ氏は、独立ではなく高度な自治を求める従来のダライ・ラマ路線を継承する考えを表明したが、独立志向が強いとされるチベット青年会議（亡命チベット人を中心として結成された非政府組織の団体）に所属した経歴から、中



写真6 巡回する武警のトラック (2011年8月筆者撮影)

国政府は強い警戒感を持っていた。

武警の包囲網はアバ市街のみならずキルティ寺にまで及んでいた。寺の入り口には臨時の公安検問所が設置され、僧の行動に目を光らせていた。中国共産党が掲げる宗教政策四原則の一つは「独立自主自営」であり、具体的には「外国の宗教勢力からの影響を排除する」「寺院など宗教活動場所を民主管理委員会が運営する」「独立した財政基盤をもつ」ことを意味している。キルティ寺はチベット本土に三十余りの末寺を抱えるゲルク派主要寺院の一つであり、キルティ・リンポチュエが一九八七年以後、ダライ・ラマの側近としてチベット亡命政府を支えたこともあり、中国政府はキルティ寺が「亡命政府の影響と資金提供を受ける」ことを恐れて、寺の動向を常に監視してきた。二〇一年八月、アバ市街に多数の武警を配置した目的は、センゲ氏の主席大臣就任に合わせて新たな抗議行動や焼身自殺が発生することを未然に防ぐためであった。

その日、アバ市街にあるモスク（一九二五年創建）では、日没後の食事会が開かれていた。ちょうどラマダン（日中の飲食を断ち神の恵みに感謝するムスリムの義務の一つ）の期間中（八月一日～二九日）であったため、三十数人のムスリムが集まっていた。ある信徒は「チベット寺院が警戒されているため、われわれムスリムの平穏な生活も奪われてしまった。ムスリムの商売にも悪影響が出てい

るし、外出に不安を感じる」「僧の焼身行為は迷惑千万だ」と激しい不満をぶちまけた。別の信徒は「アバはチベット族だけのものではない」と嫌悪感を示した。アバ州には金川、黒水、汶川、松潘等に小規模のイスラーム社会が点在するが、多数派のチベット族と少数派のムスリム（回族やサラール族）の関係（回藏民族関係）は決して良好ではなく、多くの場合、弱い立場のムスリムが我慢を強いられている。東チベット社会はチベット族と中国共産党の対立を軸に論じられることが多いが、筆者は雑居しているムスリムの意見や活動にも注目し、チベットとイスラームの紛争という視点も並行して論じる必要があると感じている。

（二）焼身抗議と僧の苦悩

二〇〇九年二月二七日、アバ市街でキルティ寺の僧タペーが焼身自殺を行った。それ以後、二〇一八年四月時点で約一五〇名の僧や民衆による焼身行為が東チベット各地で確認されている。中原一博（チベット支援NGOロンタ・プロジェクト代表）の資料によると、東チベットではアバ県での発生件数三八が最多であり（二〇一五年四月時点）、キルティ寺の僧（還俗も含む）が多数含まれている【中原2015:19】。そして二〇一一年三月一六日、同じくキルティ寺の僧ブンツォが二人目の焼身者となった。キルティ寺の僧はなぜ相次いで焼身に走ったのであろうか。そ

の伏線は二〇〇八年三月にあった。

二〇〇八年チベット騒乱は、三月にラサで行われた抗議行動（二〇〇八年ラサ騒乱）が注目を集めたが、東チベット各地で二月から七月にかけて僧や民衆が中国共産党のチベット政策や宗教政策に激しい抗議の声をあげたことも忘れてはならない（二〇〇八年東チベット騒乱、詳細は川田〔2015: 353-355〕）。騒乱が最も熱を帯びた三月、アバ市街で発生した大規模な抗議行動は公安当局と激しく衝突し、当局が民衆に銃口を向けたことにより惨劇となり、多数の負傷者がキルティ寺に運び込まれた。チベット亡命政府のキルティ・リンポチェによると、二三人の死亡者が「確認」され、証拠写真がインターネットを通じて海外へ発信された（三・一六アバ事件⁵）。一連の抗議行動は宗教・民族・人権問題として外国政府やメディアの注目を集めたが、結果的に状況の改善には至らず、公安当局によるチベット僧の管理強化という結果を招いた。

キルティ寺の僧を焼身抗議に追い込んだ理由は、二〇〇八年東チベット騒乱後の焦燥感、中国政府による愛国主義教育の実施、公安当局の寺院監視、高僧の不在、情報リテラシー等が考えられる（詳細は川田〔2015: 394-397〕）。中国政府がチベット仏教寺院とりわけダライ・ラマが属するゲルク派の有力寺院に対してチベット独立運動を否定する内容の愛国主義教育を実施しており、僧の中には過度のス

トレスを抱えている者も少なくない。筆者は二〇一一年八月アバ滞在中に、この件に関して複数の若い僧から話を聞くことができた。場所はキルティ寺付近の個人商店であり、キルティ寺と焼身抗議の問題を考える上で示唆に富む証言も得られた。

僧A「公安の管理が厳しい中、寺院を出入りする際に許可証を提示する必要がある」

僧B「不自由な僧院生活に嫌気がさして、自宅へ戻った者もいる」

僧C「二〇〇八年以後、まともな修行ができていない」
僧D「キルティ・リンポチェに寺へ戻ってきてほしい」

僧Dの発言は意味深長である。彼は「一般の僧がキルティ・リンポチェに帰還を求める発言をすることはタブーであるが、実際のところ、リンポチェがアバにいれば誰も自殺をしなかったはずだ」と苦しい胸の内を明かした。チベット亡命政府と中国共産党の和解協議が停止し、ダライ・ラマの帰還や自由な宗教活動の実現という見通しが立たない現状から、筆者はすでに「チベット問題はたそがれ時を迎えた」と考える。中国共産党は東チベットで相次ぐ僧俗の焼身抗議という事実を踏まえて、特定寺院への政治的圧力が悲劇の連鎖を生む状況を深刻に受けとめるべきである。一方、キルティ寺は今後亡命中のキルティ・リンポチェとどのような関係を結ぶのか、海外宗教勢力との交流

を禁じる中国共産党の宗教政策とどのように折り合いをつけるのか、そして青年僧をどのように育成していくのかという難題に答を見いだす努力を惜しんではならない。

三 ラルン五明仏学院改造計画

(一) 社会主義社会への適応

東チベットの政教関係を考える上で最も重要な拠点は、ラルン五明仏学院（四川省カンゼ州色達県、以下仏学院）である。ケンポ・ジグメ・プンツォ（一九三三—二〇〇四）が一九八〇年に開設したチベット仏教講習所が、一九八六年パンチェン・ラマの強い支援を受けた後、一九九七年に四川省政府より仏教教育機関として認可され大きく発展した。仏学院の特徴は宗派の枠を超えた教育内容、一万を超す学僧数、漢族出家者や漢族在家信徒の積極的な受け入れ、そして中国共産党の宗教政策への「協力」姿勢である。概ね二〇〇〇年以降、ケンポ・ソダジ（一九六二—）とケンポ・ツルティム・ロドウ（一九六二—）が中心となり組織運営と教学改革を担ってきた。二人のケンポ（学堂長）は高度な学問を有するが化身ラマではない。学僧はニンマ派やカギユ派出身者が主体であり、ゲルク派僧の入学やチベット亡命政府との交流は確認できない。

現代中国の宗教状況を論じる際、「無神論と信教の自由」という難題に悩まされる。中国共産党の宗教信仰に対する立場は無神論であり、宗教をアヘンにたとえたマルクス主義宗教観は、毛沢東から習近平の時代まで堅持されている。ただし文革終息後、共産党は「中国の特色ある社会主義」を実現する過程で、宗教の存在と意義を公式に認めてきた（中共中央一九八二年一九号文件）。そこで、中国共産党の宗教を対象とした統一戦線活動に対し、仏学院の高僧は対決姿勢ではなく「協力」の姿勢を保つことにより、国内外で活動領域の拡大を実現してきた。具体的には、中国共産党が掲げる「宗教と和諧」政策（胡锦涛・習近平時期）に沿った格差問題・貧困扶助・就学支援・災害援助・環境保護等への協力、「一帯一路」新シルクロード経済圏構想（習近平時期）に沿った諸外国との宗教文化交流や宗教間対話の実施等を通じて、国内外の大学や知識人との交流を重ね、アジア・ヨーロッパ・アフリカ各地で弘法活動を実現させてきた【川田 2017: 306-314】。

二人のケンポは『あなたは何を急いでいるのか』【索達吉堪布 2015】、『私たちはなぜ幸福ではないのか』【慈誠羅珠堪布 2014】等、漢語版仏教エッセイ集や人生指南書・自己啓発書を多数出版し、人間関係に苦悩する者や達成感に乏しい高学歴者に仏教の智慧を込めたメッセージを投げかけ、多数の漢族読者を獲得した。国内では宗教政策四原

則の一つである社会主義社会への「適應」を念頭に置いた宗教活動を模索し、外国訪問時には華人信徒への説法や大衆での講演に力を注ぎ、チベット仏教と華人ネットワークの連携構築にも意欲的である。

アバのキルティ寺の事例で紹介したように、チベット亡命政府との「交流」が疑われる主にゲルク派の有力寺院に対して、中国政府が監視と宗教活動の制限を行っていることは事実である。ただし、中国政府は国内すべてのチベット仏教組織に一律の圧力をかけているわけではない。東チベットでは仏学院、ヤチェン修行地（四川省カンゼ州白玉県）、ゾクチェン寺（同徳格県）のように、中国共産党の統一戦線活動に「從順」「協力的」という大人の対応（面従腹背の姿勢）をとることにより、大規模な教育機関、宗教コミュニティ、寺院の維持と発展に成功した例もある。仏学院とヤチェン修行地はそれぞれ万余の学僧と修行者を抱えるが、二〇〇八年東チベット騒乱の際に抗議活動に参加せず、その後焼身抗議者も出ていない。学僧や修行者を束ねる高僧（化身ラマや学堂長）が僧尼や信徒との間に築きあげた揺るぎない信頼関係が根底にあるからだ。仏学院に限って言えば、概ね二〇〇五年から一五年までの政教関係が安定した約一〇年間を、社会主義社会におけるソーシャル・キャピタル（社会関係資本、社会の信頼関係・規範・ネットワークといった社会組織の重要性を説く概念）

という役割から論じることとも可能である（詳細は川田[2012:156-184]）。

Ⅱ 二〇一六年仏学院への逆風

ところが、二〇一六年六月に仏学院をめぐる政教関係が風雲急を告げた。Voice of Tibet（ノルウェーを拠点とするチベット支援組織）がインターネット上で「中国政府は仏学院の学僧数を半減させる計画あり」と報じたからだ（六月七日^⑧）。同時に「外国人の仏学院訪問禁止」というニュースが流れ始めたため、筆者は夏に予定していた仏学院の調査を断念せざるを得なかった。このニュースに敏感に反応した香港や台湾の仏教関係者、そしてアメリカの人権擁護団体が、すぐさま仏学院の現状維持と学僧の保護を次々と訴え始めた。するとその直後に中国政府は「持続可能な仏学院を実現する目的でインフラ整備を実施する」という通知を出し、インターネット上に拡散する政府批判を沈静化させる措置をとった（六月一〇日^⑨）。肥大化した仏学院は急峻な谷間に木組みの僧坊が密集した状態にあり、大雨による土砂の崩落や火災発生の危険に直面している。そこで四川省及びカンゼ州政府は電気配線、消防設備、上水道、ゴミ処理等の懸案事項を解決する目的で大規模なインフラ整備に着手することを表明したのである。

その引き金となったのは、二〇一四年一月九日に仏学院

仏学院のケンポは「嵐が去るのを待つ」「治安当局に抵抗するな」「大騒ぎしてインターネット上に情報を出さないように」という指示を出し、学僧の動揺を鎮める努力を行った。^⑩

(三) 仏学院改造計画の目的

二〇一六年七月に始まった仏学院改造計画は、二〇一八年六月時点でも進行中であり、外国人の入構禁止措置も解除されていない。筆者は今回の仏学院改造の目的が二つあると考える。

(1) 共産党大会と「宗教事務条例」の修訂

二〇一七年一〇月、北京で第一九回中国共産党全国大会が開催され、第二期習近平政権の発足が承認された。地方の党幹部にとってチベット族やウイグル族の居住地区で宗教管理の業績を上げることが出世の近道であるため、五年に一度開かれる党大会に照準を合わせて、仏学院の僧坊と学僧の総数削減という目に見える業績、数値化できる業績作りに励んだと考えられる。仏学院に対する同様な肅正行為は、二〇〇〇年から〇一年にも行われたことがある。表向きの理由は長期・短期滞在者の適正な管理や消防対策であったが、実際は党中央統一戦線工作部の指示により、江沢民から胡錦濤への政権移行時期にチベット政策の不安定要素を除去するためであった（詳細は川田 [2015: 205-

257]）。

第一九回党大会にて習近平は中国の特色ある社会主義の実現を宣言し、党規約に習近平思想を盛り込んだ。宗教政策では「宗教の中国化」つまり宗教と社会主義の適応を積極的に導くことを強調し、全般的に宗教管理の強化を印象付けた（鄧小平以後の宗教政策の継承と発展）。宗教管理における第二期習近平政権の目玉政策は、「宗教事務条例」（二〇〇四年一月三〇日公布）の修訂であった（二〇一七年六月一四日修訂、二〇一八年二月一日施行）。条例の修訂は三年ぶりであり、第三章に「宗教院校」が新たに設けられたことは、宗教院校の設立と運営に政府がこれまで以上に強く関与することを裏付けている。つまりチベット仏教最大規模の教学機関である仏学院への強権発動は、条例の修訂に合わせた宗教管理強化方針の具現化・可視化という役割も持っている。

(2) 観光化推進の準備

二〇一七年に入って、党と政府は仏学院の改造工事を加速せよという指令を出した。仏学院にとって改造計画に伴う新たな頭痛の種は、信仰なき訪問者の受け入れ問題である。地元政府にとって仏学院の観光化推進は、交通や宿泊面で地元に必要な経済効果をもたらすとともに、宗教活動の弱体化という間接的な成果も獲得できる。ただし、学問と観光の共存は容易なことではない。

四 宗教ツーリズムの展開

信仰なき訪問者は主に漢族観光客やカメラマンを指しており、同時に海外バックパッカーの関心も強まっている。

近年の観光客増加は、二〇〇八年東チベット騒乱以後、政府の仏学院に対する宗教管理が閉鎖から開放へと転換した結果であると言える。中国では都市部労働者の観光熱が年々高まりを見せており、世俗化したラサ観光に飽きたらない観光客が東チベットのアバ州やカンゼ州に熱い視線を注いでいる。仏学院来訪者を強く惹き付けるものは、巨大な僧房群の撮影、鳥葬の見学、そして海拔約四千メートルでの高地体験である。仏学院が学問と修行の場であることを考えれば、彼らは間違いなく秩序を乱す侵入者である。大型カメラと望遠レンズを抱えた観光客の勝手な振る舞いが、学僧に大きなストレスを与えていることは嘆かわしい限りだ。しかし彼らは同時に、非日常的空間で一種の宗教的な体験を求め、新たな世界観を獲得することを期待するにわか「巡礼者」でもある。

漢族観光客が急増した理由の一つは鳥葬の見学である。「仏学院で鳥葬された者は地獄・餓鬼・畜生（三悪趣）に落ちない」というジグメ・プンツォ前学院院长の教えに基づき、仏学院にはほぼ毎日青海省や甘肅省からも複数の遺骸が運ばれてくる。筆者が二〇一二年に仏学院を訪問した

際、改造計画の予兆を確認することができた。移転した鳥葬場に大型駐車場が完備され、観光客のための鳥葬ショーと化していたのだ。新鳥葬場計画の立案者は地元の色達県政府と考えるのが自然であろう。目的は信仰なき訪問者へのおもてなし、つまり観光振興である。

二〇一六年六月以降、外国人の仏学院訪問は禁止されたが、漢族観光客は制限の対象外である。観光客が仏学院で撮影した改造計画図によると、新たな僧坊は鉄筋コンクリート造りであり、学院内には

拡張された道路や広場が設置される予定である。丘の上には来訪者用の展望台が設けられ、修行エリアと観光エリアが区別され、入場料の徴収も想定されている「易2014:34」。このように政府主導



写真9 新仏学院の青写真

http://www.sohu.com/a/134612221_186357?_f=v2-index-feeds
(2017年6月5日閲覧)

による仏学院インフラ整備計画には、宗教と観光が交差し融合する宗教ツーリズムの展開という役割も盛り込まれていたのである。

おわりに

本稿で取り上げたキルティ寺と仏学院は、チベット仏教を通して真理を探究する場であるが、背後に中国共産党の統一戦線活動という政治の影が見え隠れしている。共産党は宗教指導者に統一戦線活動を行う際、柔道の寝技の如くじわじわと相手を攻めて懐柔する。例えば、高僧が党の宗教政策に従うと誓えば攻めの手を一時的に緩めるが、反抗姿勢を示すと一気に締めつけて圧倒する。中国共産党批判を強めるチベット亡命政府に対しては、代理交渉ではなく外交手段を巧みに駆使して圧力を強め、外堀を埋めて焦りを引き出している。

最後に、統一戦線活動の視点からキルティ寺の問題を考えてみる。一九八七年中国共産党がキルティ・リンポチェにインドからアバへの一時帰還を要請し、キルティ寺大仏塔の竣工式に招待した。座主にキルティ寺の再建を約束し、高僧の地位と活動の自由を確約することで、党が進める宗教復興政策への協力を求めたのである。しかし中国当局の懐柔策は実を結ばず、キルティ・リンポチェはインド

へ戻った後、ダライ・ラマの側近として亡命政府で要職を務めた。それから二十余年後、キルティ寺の僧が相次いで焼身抗議を行った際、共産党は武警を動員して寺院を包囲し、チベット亡命政府と結託し祖国分裂を画策する「犯罪者」として多数の僧を容赦なく取り締まった。キルティ寺は今後も治安当局の制裁対象リストに名を連ねる道を選ぶのか、それとも社会主義社会への「適応」の道を模索するのか、重大な岐路に立たされている。亡命から六〇年が経過した今、インド在住の座主が中国共産党との関係をめぐって、キルティ寺の僧に明確な指針を示すことを筆者は期待したい。

仏学院は一九八〇年の仏教講習所開設以来、中国共産党の統一戦線活動に柔軟に対応してきた。初代学院長のジグメ・プンツォは色達県で中国人民政治協商会議の委員を務め、パンチェン・ラマとの交流を通じて仏学院運営の礎を築いたが、二〇〇四年に「仏学院の存続を切に願う」という遺言を残して遷化した。高弟である二人のケンポは、「宗派を超えた教学機関を維持せよ」というパンチェン・ラマの教えと師の遺言を守り、共産党が掲げる「宗教と和諧」政策や「一带一路」宗教交流政策に協力的な姿勢を保つことにより、仏学院の運営を軌道に乗せ、活動領域を広げることに成功した。そして、その過程で多数の漢族信徒を集め、漢族知識人を味方に付け、海外から中国とチベッ

トを見る視点を獲得した。その一方で、仏学院の対応は「権力へのすり寄りだ」という批判もある。ただし、仏学院の存続を念頭に置いてケンポたちの当局への「協力」姿勢の内側には、中国共産党の宗教支配に対するしたたかな「抵抗」の意志が込められていると筆者は考える。当局からの干渉を最小限に留めて自らの宗教活動の場を守るには、交渉を拒否するのではなく応じる態度を示すことが得策と判断したのである。二〇一六年以降、仏学院は政府が強行するインフラ整備計画と観光化推進政策という難題に直面しているが、ケンポは学僧に「当局に抵抗せず嵐が過ぎ去るのを待て」という指示を出した。仏学院のケンポと学僧を支えているのは、二〇世紀後半に政治の大混乱を乗り越えてチベット本土に留まり、仏学院を開設したジグメ・プンツォ前学院院长への尊敬の念と信頼感である。東チベットの政教関係を考える上で、高僧の役割と師弟関係という視点を軽視することはできない。

最後に、今回紹介することができなかったが、東チベットで存在感を増しているヤチェン修行地と同じく政府の観光化推進政策に揺さぶられているが、高僧アソン・リンポチェが政府に宥和的姿勢を示し、修行者たちと信頼関係を築くことで、大規模な宗教コミュニティの秩序が保たれていることを書き加えておく。

〔付記〕第一節の記述は川田 [2002] の内容と重複する箇所がある。本研究はJSPS 科研費 16K02022、16H05712 の助成を受けたものである。

注

〔1〕 本稿における東チベットはカムとアムドを合わせた地域であり、現在の行政区画では四川・青海・甘粛・雲南省内のチベット族居住地区に相当する。チベット自治区内のチャムドやナクチュ等も歴史的区分ではカムであるが、外国人の入域が困難なため調査地から除外した。

〔2〕 李江琳「阿壩自焚事件的背景——專訪格爾登仁波切」
<http://www.epochtimes.com/gb/11/12/8/n3451686.htm> (二〇一八年四月二五日閲覧)。

〔3〕 拙著の中で、キルティ十一世の帰還は実現しなかったと記したが誤りであった [川田 2015: 395]。一時帰還時期は文献資料により異なる。阿壩州政協文史和学習委員会編 [2011: 238] は一九八四年、阿壩県地方志編纂委員会編 [1993: 603] は一九八七年と記している。本稿では大仏塔竣工時期との関係から後者を採用した。

〔4〕 江沢民が掲げた宗教政策四原則 (二〇〇二年) とは、(1) 宗教信仰の自由、(2) 法に基づく宗教事務の管理、(3) 独立自主、(4) 宗教と社会主義社会への適応であり、習近平政権においても四原則は維持されている。

〔5〕 注〔2〕に同じ。

〔6〕一九九〇年にジグメ・プンツォはインドを訪問した

〔7〕「西藏色達五明仏学院過半僧尼將遭驅逐」(二〇一六年六月七日) <http://www.voc.org.cn/%e8%a5%b%fc%8%97%98%fc%8%9b%2c%8b%e%4c%ba%94%e6%98%8c%4b%bd%9b%e5%ad%a6%e9%99%a2%e8%b%88%7c%e5%8d%81%e5%83%7a%e5%8b%bc%e5%bd%86%9c%98%1%ad%e9%9a%9b%1%e9%80%90/> (一〇一七年六月五日閲覧)。

「色達五明仏学院要遭拆了？你信了嗎？」<https://mp.weixin.qq.com/s/08UWtYDQFvTjZGKXN9Bz6g>

weixin.qq.com/s?__biz=MzA4NTU0NDgyMg==&mid=2651871869&idx=1&sn=7e868692494ca601f2822dc17055a9 (一一一七八八月三日閱覽)。

〈9〉「武警8740部隊官兵全力參與五明仏學院火災救援」
http://news.xinhuanet.com/mil/2014-01/16/c_126013127.htm
(二〇一四年一月一七日閱覽)。

〈10〉「西藏色達喇榮僧舍開拆堪布慈誠奉勸信眾勿衝動」(二〇一六年七月二日) <http://www.voc.org.cn/%E8%AC%A5%BF%E3%97%A8%E8%89%A2%E8%BE%BF%E5%96%87%E8%8D%A3%E5%83%A7%E8%88%8D%E5%BCE8%80%E6%8B%86%E5%A0%AA%E5%B8%83%E6%85%88%E8%AF%98%E5%A5%89%E5%8A%9D%E4%BF%A1%E4%BC%97%E5%8B%BF%E5%86%B2%E5%8A%A8/> (二〇一六年七月二

五日閱覽)。

〔12〕 ヤチュエン修行地は一九八五年にアチユウ・ラマ（一九二七―二〇一一）が開設した。修行者はチベット仏教ニンマ派の僧尼が中心であるが、他宗派の受け入れも行う。漢族の出家者や信徒も多数存在している。宗教難民村の役割も担っている。川田〔2015: 237-322〕を参照。

参考文献

阿壩県地方志編纂委員会編 1993 『阿壩県志』 民族出版社
阿壩州政協文史和学习委員会編 2011 『阿壩州藏伝仏教開放寺院資料匯編』 政協阿壩州委員会
慈誠羅珠堪布 2014 『我們為何不幸福』 貴州人民出版社
国家宗教事務局編 2005 『愛国主義教程』 宗教文化出版社
索達吉堪布 2015 『你在忙什麼』 民主与建設出版社
易立競 2014 「索達吉堪布上師下山」『南方人物周刊』三八
八、三二—四二頁